カール・フォン・クラウゼヴィッツと絶対的戦争（上）

山　崎　カヲル

はじめに

私たちはすでに旧稿（山崎 2020）において，カール・フォン・クラウゼヴィッツ（Carl von Clausewitz, 1780–1831）が戦争を，暴力という手段を用いた，人間集団間での極限的な相互交通（この相互交通とは，今日でいう広義のコミュニケーション）と把握していたことを取り上げた。したがって，彼にとっては，戦争は独自のコミュニケーションをなすものとして，交易や政治と比べることができる人間の広範な相互行為の一部をなしている。

問題はその独自性にある。なにが戦争をして，それ以外のさまざまなコミュニケーション様式とは明確に異なった特性を持つのか，という問いがただちにそこから立ち上がってくる。クラウゼヴィッツによれば，それは戦争に固有の手段，手段の独自性に求められる。戦争が「ひとつの真の政治的道具」と規定されるなら，「そうなると戦争にまだ固有なものとして残るのは，単にその手段の固有な本性とかかわるにすぎなくなる（Was dem Kriege nun noch eigentümlich bleibt, bezieht sich bloß auf die eigentümliche Natur seiner Mittel）」（VK: 210/I-1-24）のである。そして，「手段は決して目的なしには考ええない」（Ibid）のであるから，「目的」（Zweck）こそが手段の固有性・独自性を最終的に規定することになる。目的に関して適合的な手段とは，この場合，相手側に振り向けられる暴力にほかならない。その暴力の総体が，戦争と呼ばれるのである。

本稿で私たちが扱うのは，この目的による手段＝戦争のあり方である。

絶対的戦争という虚構

クラウゼヴィッツは『戦争論』において，従来の戦争理論とは異なったいくつもの概念＝観念を導入している。それらの多くは現在にいたるまで，議論の渦のなかにあって，最終的な決着がついていない。そのなかでもとりわけ議論の的になったもののひとつが，「絶対的戦争」（der absolute Krieg）であることは疑いえない。彼は『戦争論』第 8 篇の諸章において，特にその第 2 章「絶対的戦争と現実的戦争」のなかで，「哲学的」で「本来的＝固有の」概念として定義される絶対的戦争，すなわち「絶対的形象」における戦争と，現実的に多様な姿で現れる「現実的戦争」（der wirkliche Krieg）とを区別したうえで，両者の関係＝差

異を明らかにしようと努めている。現実において戦争は，国家のうちにあるさまざまな，相互に対立する諸知性のあいだでの葛藤によって，概念として首尾一貫した実現を阻まれ，「みずからの不明確性，中途半端さ，首尾一貫性のなさ」（seine Unklarheit, Halbheit und Inkonsequenz）をさらけ出すことになる。

「このような首尾一貫性のなさは，彼我双方の一方か他方で生じるし，双方で生じることもあって，そのことは戦争がその概念にしたがってあるべきもの（dem Begriff nach sein sollte）とはなにかまったく別のもの（etwas ganz anderem）に，つまり，中途半端なもの，内的連関なき本質に（zu einem Halbdinge, zu einem Wesen ohne inneren Zusammenhang）なる原因なのである。」（VK: 953/VIII-2）

純粋概念から導出される戦争は，彼我双方の「生死を賭けた闘争（ein Kampf auf Leben und Tod），つまり，少なくとも両陣営の一方が決定［決戦］を絶対に（schlechterdings）求める闘争」（VK: 813/VI-28）にほかならない。しかしながら，ここで私たちが着目しなければならないのは，このような絶対的戦争，つまり概念から導出され，戦争以外のいかなる要素も含まれない純粋の戦争は，『戦争論』第8篇で大きな対象として特記され，それこそがクラウゼヴィッツ戦争論の白眉であるように見做されてきたが（そして今日でも実にしばしば見做されているが），それはきわめて疑わしいのである。

「危機」を告げるふたつのテクスト

ここで私たちはまず，1827年にクラウゼヴィッツがみずからも認めているように，思想的な転換を経験したことを強調しておきたい。27年に彼がそれまで『戦争論』で展開していた戦争理論を大きく変更し，新しい理論地平を構築したことは，すでに第2次世界大戦以前にヘルベルト・ロジンスキやエーベルハルト・ケッセルたちによって指摘されていた（Rosinski 1935; Kessel 1987）。大戦後のクラウゼヴィッツ研究にとって画期的な，レイモン・アロンやピーター・パレットの著作においても，そのことは特記されている（Aron 1987; Paret 1985）。とはいえ，1827年の転換に新たな光を当てて，その意義を改めて私たちに告げたのは，イスラエルの軍事思想史研究者であるアザー・ガットである。彼は1989年に出版した『軍事思想の諸起源』（Gat 1989）において[1]，マキャヴェッリから啓蒙思想に，さらには啓蒙主義からクラウゼヴィッツにいたる軍事思想史を概観しているが，そこでクラウゼヴィッツが1827年に思想的な「危機」に陥っており，その危機の克服のために，ガットが「危機」として把握したこの転換を伝えているふたつのテクストが，私たちの手元にある。

そのひとつは，1827年7月10日という日づけを持った「覚書」（Nachricht）である。この短いテクストは，『戦争論』が『戦争及び戦争指導に関するカール・フォン・クラウゼヴ

ィッツ将軍遺稿集』の第1巻から第3巻としてはじめて活字になったさい，編者だったマリー・フォン・クラウゼヴィッツによって，第1巻冒頭に置かれた彼女の「序文」のあとに収録されている（Clausewitz HW 1: xv–xviii; VK: 179–81）。以来，『戦争論』のほとんどすべての版には，このテクストが収められているので，『戦争論』の読者には馴染み深いテクストだといえる。本稿ではそれを「27年覚書」として引用する。

もうひとつは，同年12月末に書かれたレーダー少佐への手紙である。すでに別稿で少々触れておいたが（山崎2020：111–2），この手紙は友人のカール・フェルディナント・フォン・レーダー少佐に宛てたもので，同年12月22日に書かれており，さらにそれに追伸があって，それは直後の24日という日づけを持っている（Clausewitz 1937）。当時のプロイセン陸軍参謀総長だったフリードリヒ・フォン・ミュフリング将軍は，参謀本部にいたレーダーにひとつの戦略課題を与えている。参謀本部でのレーダーの職責は中部戦場部長（Chef des mittleren Kriegstheaters）であって，主としてオーストリア，副次的にそれに同盟する可能性があるザクセンが担当地域であった。ミュフリングの想定では，15万のオーストリア軍がザクセンに支援されてプロイセンに侵攻するとした場合の，敵の情勢判断とそれへの対策（当時のプロイセン軍部の通例として，まずは防衛戦争が考慮されている）が，レーダーに課せられた課題であった。レーダーは彼なりの解答と，さらに参謀本部のM大尉のそれを添付してクラウゼヴィッツに送り，その見解を求めたのである（レーダーは年来のクラウゼヴィッツの友人であった）。クラウゼヴィッツは予てから，政治的考慮なしで軍事的にのみ物事を考えるという，プロイセン軍部の主流に支配的だった見解に否定的であって，ミュフリングの課題そのものに正面から反論を企てている（それは同様な主張を繰り広げていたレーダーへの批判でもあった）。レーダーへの手紙の主要部分は基本的な対抗策を中軸にしているが，その具体的な展開はもはや歴史的価値しかないので，省略する。しかし，クラウゼヴィッツは第1の手紙の冒頭で，「27年覚書」での簡潔な提示をさらに詳しく展開している。この手紙はクラウゼヴィッツの27年を語るとき，「27年覚書」と，少なくとも同等の価値を持ったテクストとして扱われるべきであろう。レーダーへの手紙は，その重要性にもかかわらず，日本ではまったく紹介されてこなかった。本稿では，その基本部分を付録として訳出しておく。

27年の転換

上記ふたつのテクストは，クラウゼヴィッツが1827年に思想的に大きな転換を遂げたことを伝えている。その転換の内実が，つぎに問われなければならない。

27年には今日『戦争論』として私たちに与えられている著書の基本部分は，ほぼ完成していたと考えられる。とはいえ，そのもっとも核心的な思想を，クラウゼヴィッツはドラス

ティックに変更している。彼は「27 年覚書」の書き出しで，「私はすでに清書されている最初の 6 つの篇を，いまだにかなり未完なものだとみなしており，それはいま一度徹頭徹尾（durchaus）改訂されなければならない」と述べている。この「改訂」は果たされないままに終わったが，その大まかな趣旨は，上記のふたつのテクストで追うことが可能である。

それはまず，「2 種類の戦争」（die doppelte Art des Krieges）の登場によって特徴づけられている。

戦争が大別するとふたつの類型に属しているという発想は，彼には早くから登場していて，すでに『1804 年の戦略』と名づけられたテクストに現れている。これは 1804 年に執筆された 28 の断片的な考察の集成であり，1937 年の発行にさいして，さらに 1808 年の「戦略の抽象的諸原則について」と，1809 年の「河川防御と渡河」「山岳戦について」「カエサル」「戦略と戦術」を加えて，エーベルハルト・ケッセルによって公刊された。1804 年はクラウゼヴィッツのベルリン歩兵・騎兵青年士官養成所時代の最終年次に当たっている。この断片集は前時代の軍事書にしばしば見られたアフォリズムという形式を踏襲している（Cf. 山崎 2021：107）。

その断片 13「作戦計画」には，つぎのような 1 節がある。

「戦争の政治的目的（der politische Zweck）には，2 種類がありうる（kann doppelter Art sein）。敵を完全に撃滅して（vernichten），その国家実在を廃棄するか，さもなければ，敵に講和条件を指示するか（ihm beim Frieden Bedingungen vorzuschreiben），である。いずれの場合においても意図されるべきなのは，敵の諸力をまったく喪失させて，敵がもはや戦争を継続しえなくなるか，あるいは，その全実在を危険にさらさずには継続しえなくなることである。」（VkS: 20）

ここでは明らかに，撃滅戦争と，撃滅にはいたらないで講和を達成する戦争とが「種類」（Art）の違いとして対比させられている。講和へといたるための手段（種類）の複数性が明記されているのである。その違いは「政治的目的」によって規定されるとも明言されている。とはいえ，1804 年にクラウゼヴィッツはたった 24 歳の青年であって，後年の理論的成熟が繰り出した理解を，あまり性急にそこに投影すべきではなかろう。「種類」という用語は使われているが，それと「政治的目的」とは有機的な結合関係を持っていない。

さらに強調しておかなければならないことは，『1804 年の戦略』のあと，このような戦争形式の違いをクラウゼヴィッツは一度は捨て去っている。『戦争論』第 8 篇第 6 章 B においては，戦争にはただの 1 種類しかないと，つぎのように語られているからである。

「戦争は政治に属しているので，政治の性格を帯びることになる。政治が強大かつ強力になればなるほど，戦争もそうなるのであって，こうしたことが高度にまで高まりうるなら，戦争はその絶対的形象（seine absolute Gestalt）をうるのである。

私たちはこうした表象様式にあっては，そのような形象における戦争を見失うことなく，

むしろその像（Bild）を絶えず背景に浮かべていなければならない。

このような表象様式を通じてのみ，戦争はふたたび単一体〔統一体〕（die Einheit）になるのであって，この単一体によってのみ一切の戦争をひとつの種類の事象（Ding *einer* Art）として考察しうるし，また，それを通じてのみ判断に正しく厳密な立場や観点が与えられうるのである。そして，そのような立場や観点から，大いなる戦争計画は作成され，評価されなければならない。」（VK: 992/VIII-6B-- 引用中のイタリック〔訳文では傍点〕による強調は，原文のもの）

明らかに上記の文章では，戦争が絶対的形象であるような場合，それは単一の表象であって，すべての戦争がそこでは「ひとつの種類」（eine Art）として考察されることがきっぱりと主張されている。

つまり，1804 年での 2 種類の戦争という区別は，『戦争論』の執筆段階で放棄されているのである。それが 27 年にどのように新たな内容で復活したのか，そのかなり錯綜した過程をやがて追うことにするが，まずはただちに 27 年における「2 種類の戦争」について，クラウゼヴィッツの見解を検討することにしたい。

「2 種類の戦争」

「27 年覚書」で強調されている点は，ふたつある。

ひとつは，すでに浄書稿の段階にあった第 1 篇から第 6 篇までの草稿がいまだに不充分であって，それが「いま一度徹頭徹尾（durchaus）改訂されなければならない」が，その改訂にさいしては「いたるところで 2 種類の戦争（die doppelte Art des Krieges）によりはっきりと留意したい」とされることである。

「この 2 種類の戦争とは，［まず第 1 には］敵の打倒（das Niederwerfen des Gegners）を目的とする戦争であって，そのさいに敵を政治的に撃滅するか（politisch vernichten），あるいは単に敵を無力化して，好ましい講和を強要するかは問題ではない。また［第 2 には］単に敵国の国境付近でいささかの領土の攻略を行なう戦争であって，その領土を領有するためか，あるいは講和にさいして有利な取引材料として使うためかは問題ではない。一方の種類から他の種類への移行はいうまでもなくありうるに違いないが，とはいえ，双方の試みが持っているまったく異なった本性（die ganz verschiedene Natur）はつねに強調しなければならないし，相互の非両立性（das Unverträgliche voneinander）は明示されなければならない。」

そしてふたつには，クラウゼヴィッツのもっとも人口に膾炙した命題である，「戦争とは他の手段をもって継続される国家政治だ（die fortgesetzte Staatspolitik mit anderen Mitteln）という観点」の確立である。戦争は本質において政治であり，ただしそこで行使され

る手段が通常の政治とは異なっているとされる。

第2の命題については，のちにさらに検討することにして，まずは第1の「2種類の戦争」に議論を集中しよう。

レーダーあての手紙では，2種類の戦争に関してつぎのようにいわれている（引用は本稿末尾の付録2からなされる）。

「私が敵を打倒して無力にし，彼に私の講和条件の受諾を強制するという意図を持っていたり，持とうと望んだりすることと，ちょっとした地方やどこかの要塞等を征服して，講和までそれを手元に置いておき，その等価物を要求するための利益をえることで満足することとは，明らかにまったく別個なものなのである。ボナパルトとフランスが革命戦争以来置かれていた例外的な相互関係（die außerordentlichen Verhältnisse）は，彼をしてほとんど常にいたるところで前者（das erstere）を可能にさせたため，それから発生する構想とその実行とを普遍的な規範（die allgemeine Norm）だとする考えが広まった。だが，それによってこれまでの戦史全体を，ひとまとめに判定できるとするなら，それは愚行にほかならない。」

ここでは「27年覚書」におけるほど明示的に「2種類の戦争」は説かれていないが，上記の引用に現れている「前者」（das erstere）は文字通りに訳せば「第1のもの」である。この「第1」の戦争とは，敵の打倒（Niederwerfung）を通じての講和の強制であり，ボナパルト以来，そのようなタイプの戦争こそが「規範」とされたと，クラウゼヴィッツは指摘する。『戦争論』ではこの「規範」に関して，こうも触れられている。

「戦争指導の領域における新しい諸現象については，新しい発見や新しい思想傾向に帰せられるものは非常に少なく，多くは新しい社会的な状況や相互関係に由来する。とはいえ，これらの状況や相互関係は，騒擾過程（eine Gärungsprozeß）で生じる危機においては，ただちには規範（der Norm）とはなりえないのであって，それゆえに，旧来の戦争関係の大部分がふたたび出現するであろうことを疑うわけにはいかない。」（VK: 856/VI-30）

「騒擾過程」がなにを意味するかは分明でないが，おそらくはフランス革命からはじまるヨーロッパの巨大な政治的変動を指しているのであろう（Gärung とは生化学でいう発酵であって，なにかが変容して生じることである）。

さらに上記に引いた手紙の文章につづけて，こう述べられている。

「私たちは戦争術を戦史から導出したいし，それこそが疑問の余地なく［洞察に］到達するための唯一の途なのだから，こうした戦史が語ることを過小評価してはならない。もしかすると，50の戦争のうち49までが第2種（die zweite Art）のそれだと，つまり，敵の打倒を目指していない，制限された目標（eine beschränkes Ziel）をもった戦争だということを見いだすとしても，私たちはそれが［戦争という］事物の本性のうちにあるのであって，常に間違った見解やエネルギーの欠如等に起因するものではないと確信している。」

「第１の」戦争につづいて「第２種のそれ」が語られている以上，レーダーあての手紙でも「2 種類の戦争」という考えは保持されていると見るべきであろう。それゆえに，1827 年段階でのクラウゼヴィッツは，戦争が単一の種類に還元可能だとする『戦争論』での断言にもかかわらず，そこから大きく踏み出して，戦争には単に敵の撃滅を目的とするタイプと，「制限された目標」が課せられているタイプとがあることを教えてくれている。

手紙はさらに，つぎのようにつづく。

「私たちとしてはさらに，戦争を単なる暴力と撃滅の行為（ein bloße Akt der Gewalt und der Vernichtung）と見なして，こうした単純な概念から論理的帰結として一連の結論を引き出してしまう誘惑に陥るべきではない。そのような結論は，現実的世界の諸現象と決して合致しないのである。そうではなく，現実的戦争はひとつの政治的行為（ein politischer Akt）であり，その法則は完全にそれ自体のうちで支えられているわけではなく，戦争はひとつの真に政治的な道具（ein wahres politisches Instrument）であり，それ自体で働いているのではなく，別の手によって導かれているということに立ち返るべきである。この手とは，政治のことである。政治が強大な利害関係，全体とその現状とを包括している利害関係から生じれば生じるほど，［戦略］課題が存在か消滅かのいずれかにかかわればかかわるほど，政治と敵対性とは合致し，政治は敵対性へと吸収され，戦争は単純になって，暴力と撃滅という概念からだけ由来することになり，戦争はこの概念から論理的に展開されうる一切の要請に対応するようになり，その一切の部分がなんらかの必然性ある連関を持つようになるのである。そうした戦争はまったく非政治的な外観を示すために，それこそが規範的な〔正常な〕戦争（der Normalkrieg）だと見なされてきた。しかし，ここでも他の戦争にあってと同様に，政治的原理（das politische Prinzip）は明らかに存在しており，それは暴力と撃滅という概念と完全に合致しているが，ただ私たちの眼から隠されているにすぎないのである。」

1827 年の転換は，レーダーへの手紙のこのように凝縮された文章のなかにもっとも明瞭に表現されている。とはいえ注意されるべきなのは，そこに含意されている思想を充分に解明するためには，さらに多くの補助線を引く必要がある。そのさいに参考になるテクストは残念なことにきわめてわずかであって，その多くは 27 年前後に書かれた戦史研究のなかに埋もれている。

絶対的戦争の内実

周知のように，とりわけ『戦争論』第 8 篇「作戦計画」において，クラウゼヴィッツは絶対的戦争と現実的戦争という，戦争の対立的な 2 形式を前面に押し出している。この絶対的戦争はこれまで多くの論者によって，彼の戦争理論の基軸的な概念＝観念だと受け止められ

てきた。絶対的戦争を巡るさまざまな理解（その多くは誤解）の積み重ねこそが，従来のクラウゼヴィッツ研究の中心課題のひとつであった。

絶対的戦争とは彼のことばによれば，つぎのように定義される。

「ひとつの決定［決戦］を求める思想（der Gedanke einer Entscheidung）が［戦争］全体を貫徹し指導しているような例を取り上げ，つまりは，固有の戦争（der eigentliche Krieg）――いうなれば絶対的戦争（der absolute Krieg）」（VK: 813/VI-28）

つまり，それはひとつの決戦に凝縮される撃滅戦であり，それによって敵を完全に打倒し，講和を達成するような戦争にほかならない。それは「まったくの敵対性から生じる生死を賭けた闘争（Kämpfe auf Leben und Tod）」（VK: 993/VIII-6B）である。「生死を賭けた闘争（eine Kampf auf Leben und Tod），つまり，少なくとも両陣営の一方が決定［決戦］を絶対に求める闘争」（VK: 813/VI-28）ともいわれている。具体的に思い描くなら，1806 年 10 月のイエナ＝アウアーシュテット二重会戦がそのひとつで，この二重会戦でボナパルトのフランス軍に決定的な敗北を喫したプロイセンは，翌年に屈辱的なティルジット条約を締結させられたのである。クラウゼヴィッツはこの敗北にさいして捕虜となり，フランスに拘留された経験を持つ[2)]。

しかしながら，この絶対的戦争については，第 8 篇での記述にはいまだに解明を要するいくつもの問題が含まれている。

絶対的戦争と充分理由律

絶対的戦争の内実に関して，これまでの研究はおよそ満足できるものではない。その不充分さが「2 種類の戦争」理解を混濁させているので，絶対的戦争に関しては，さらなる解明が必要である。

例えば，晩年のクラウゼヴィッツにおける 1827 年の意義を問い直して，改めて「27 年覚書」の重要性を力説したアザー・ガットは，こういっている。

「1827 年 7 月の覚書において，クラウゼヴィッツは絶対的と制限的というふたつのタイプの戦争があること，また，戦争とは他の手段をもってする政治の継続だということの新規の発見が著書に持っている広範な含意を評価している。」（Gat 1989: 256）

ガットは「2 種類の戦争」のうちの第 1 のものを「絶対的戦争」と同一視している（Cf. Ibid: 260）。これはガットのみならず，多くの論者が陥っている誤りである。その誤りは，第 8 篇での絶対的戦争が背景にしている独特な理論的土台に眼を向けていないことから生じている。

その土台とは，ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leipniz, 1646-1716）によって提示された「充分理由律」（der Satz des zureichenden Grundes，principium rationis sufficientis）

にほかならない。ライプニッツはいうまでもなく，近代哲学史を飾る巨人のひとりだが，その哲学の基礎を「矛盾律」（同一律）と，「充分理由律」というふたつの原理に置いていた[3)]。ここで問題になるのは，そのうちの「充分理由律」である。クラウゼヴィッツが直接にライプニッツの著作に親しんだ形跡はまったく見出されないし，ライプニッツの名前は彼の諸テクストに一度も登場したこともない。おそらくは若い頃（青年将校研修所時代）に論理学や数学を学んだ，カント派哲学者のヨーハン・ゴットフリート・キーゼヴェッター（彼はその晩年にいたるまで，クラウゼヴィッツの賞賛を勝ちえていた[4)]）に教わったか，なにかの折りに入手した知識によったかは判らないが，充分理由律そのものは18世紀から19世紀にかけてのさまざまな哲学書にしっかりと組み入れられており，クラウゼヴィッツがそれを知っていたことは疑えず，そのことは『戦争論』での「充分理由」[5)] や「オプティミズム」[6)] への言及から推測できる。どのような経路で獲得した知識なのかは判らないにしても，クラウゼヴィッツが充分理由律を知っていたことは疑いえないのである。

加えて，クラウゼヴィッツがおそらくラプラスの確率論に関して，なにがしかの知識をえていたことは，ほぼ確実と思われる。

ピエール＝シモン・ラプラス（Pierre-Simon Laplace, 1749–1827）はいうまでもなく，啓蒙期フランスが生んだ傑出した数学者・天体物理学者で，その著書『確率論の哲学的試論』（1819年）は，彼が完成した古典的確率論の平易な入門書としてよく知られている。クラウゼヴィッツは『戦争論』の各所で確率（確からしさ）に触れており，確率論に関してなにがしかの知識を持っていたと推測可能である（彼が歩兵出身でありながら，1830年に砲兵監に就任できたのは，弾道学などについて，それなりの知識を持っていたからであろうし，その弾道学は確率論の理解を必須としていた）。広く一般に流布していたラプラスの同書を，クラウゼヴィッツが読んでいたと想定しても無理はないと思われる。そのラプラスは上記の『哲学的試論』において，ライプニッツの名前を明記したうえで，「充分理由律」についてこう語っている。

「私たちはしたがって，宇宙の現在の状態はそれに先行する状態の結果であり，また，それにつづく状態の原因であると考えなければならない。ある知性（une intelligence）が，与えられた時点において，自然を動かしているすべての諸力と，自然を構成している一切の存在の各々の状況を知っているとし，さらには，これらの与えられた情報を分析する能力をもっているとしたならば，この知性は同一の方程式のもとに宇宙のなかのもっとも大きな物体の運動も，また，もっとも軽い原子の運動をも包括しせしめるであろう。この知性にとっては不確かなものはなにひとつないであろうし，その眼には未来も過去と同様に現前することであろう。」（Laplace 1819: 5–6〔邦訳：10〕）

ここで述べられている「知性」は，のちに「ラプラスの魔（デーモン）」として知られるようになる，架空の全知全能な存在である。それは世界の因果連鎖のすべてを把握して，発

端から結末までを一挙に見通せるのである。そして，私たちはこのデーモンが，クラウゼヴィッツのうちにしっかりと生きていることを確認しなければならない。彼は『戦争論』第8篇第3章Aにおいて，つぎのように述べている。

「一切が必然的理由から生じ，一切がまったく［歯車のように］密接に関連しているという，戦争の絶対的な形象にあっては（bei der absoluten Gestalt des Krieges），私はあえていわせてもらうが，無内容［本質不在］で中立的な間隙（wesenloser neutraler Zwischenraum）は存在しない。そこでは，戦争に含まれている多様な相互作用のために，連続して生じる戦闘の全系列を厳密に結んでいる連関のために，あるいは，どのような勝利にもあって，それを越えると損失と敗北が開始される極限点のために，また，戦争のこうした一切の自然的な相互関係のために，単にひとつの結果，つまり，最終結果（der Enderfolg）しかありえないのである。そこにいたるまでは，なにも決定されず，なにも勝ち取れず，なにも失われない。このことについては，終わりが仕事を仕上げる，とつねにいわざるをえない。こうした表象においては，戦争はひとつの分割不可能な全体（ein unteilbares Ganze）であって，その分節（個々の成果）はこうした全体との関連においてのみ価値を有するのである。」（VK: 956/VIII-3A）

クラウゼヴィッツが語っているのは，決定論が支配するまさしくラプラス的世界での出来事である。それは偶然を確率の問題として処理することを可能にする。

上記の文章を，例えばイマヌエル・カントの『プロレゴーメナ』での，つぎのような表明と比較してみよう。

「しかしながら，純粋理性はひとつのきわめて分離された領域，そのなかでは［一切が］きわめて一貫して結合されている領域（eine so abgesonderte, in ihr selbst so durchgängig verknüpfte Sphäre）であって，このために，そのいかなる部分も，他のすべての部分にかかわりを持つことなしに触れることはできないし，また，あらかじめ個々の部分に固有の位置を定めたり，他の諸部分へのその影響を定めたりすることなしには，なにも達成できないのである。というのも，私たちの判断を内部で正しうるのは純粋理性よりほかにはないがゆえに，おのおのの部分の妥当性と使用とは，理性そのもののなかで他の諸部分に対して持つ関係に依存しており，有機体の分節構造（der Gliederbau eines organisierten Körpers）と同様に，おのおのの分節の目的は完全な全体概念からのみ導出されるのである。」（Kant 1968: : 122/A19-20）

カントが語っているのは純粋理性であって，そこではまさしくライプニッツ的な充分理由律が働いているのであり，さまざまな部分は分節として相互に結合し，それが全体を構成しているのである。ここでの純粋理性を戦争と置き換えて『戦争論』のどこかに挿入しても，なんの違和感もないであろう。というのは，カントがしたがっているのが充分理由律であって，『戦争論』の著者も同様だからである。

カントやラプラスが充分理由律を介して語っていることは，クラウゼヴィッツの絶対的戦争論と同一の地平にある。このように絶対的戦争とは，充分理由律が支配している領域であり，いわば観念の産物なのである。

絶対的戦争は以上のような観念＝理念の結果として立ち現われるのであって，経験（戦史）から抽出されているわけではない。したがってここで，私たちは理念と現実との関係という難問に直面する。現実の戦争がきわめて多様な姿を呈していることを，クラウゼヴィッツは知悉していた。ケンメラーによれば，彼は生涯にわたって 130 以上の戦争・戦役を研究対象にしていたとされる（Caemmerer 1905: 76）。このように戦史について豊富な知識が一方にあり，他方では戦争を統一された理論的対象として把握しようとする情熱[7] が彼を動かしてもいた。両者のあいだをどのように架橋するかは，彼にとっては最大の問題のひとつであった。『戦争論』第 8 篇では，彼は現実的戦争が理念的戦争の「修正」（Modifikation）として説明可能だと考えていた。そこで彼は絶対的戦争と現実的戦争とをふたつの対極的な表象様式と捉えて，こう述べている。

「これらふたつの表象は，いずれもなんらかの結果をもたらすので，理論は両者のいずれをも欠くことができない。理論が両者の使用においてなす区別は，理論は第 1 の表象を基本表象として（als die Grundvorstellung）いたるところで根底に置き，第 2 の表象を単に状況によって正当化される修正として（als eine Modifikation）使用することである。」（VK: 957-8/VIII-3A）

ここでいわれる「修正」（Modifikation）とは様態（modus）の変化であり，様態とは一般に実体の変容したあり方を意味している。すなわち，偶有性の介在によって実体がなんらかの変化をこうむる場合，それによる様態変貌した姿が「修正」にほかならない。第 1 種の戦争がまずは「基本表象」として提示され，ついでその「修正」によって第 2 種の現実的戦争が産出されるわけである。『戦争論』第 8 篇での現実的戦争は，決して戦史から導出された現実のそれではなく，絶対的戦争の逆像として理念的に想定された擬似的な現実にほかならない。

だが「27 年覚書」では，まったく別個の 2 種類の戦争が登場している。いまや第 2 種の戦争は「まったく異なった本性」（die ganz verschiedene Natur）を持つとされ，第 1 種の戦争とは「非両立的」（unverträglich）だと宣告されるのである。それは単なる「修正」によっては把握不可能な領域なのである。種類がまったく異なるふたつの戦争形式があり，そのおのおのが別個の「本性」（Natur）を持つとされるなら，戦争はもはや単一の本性＝実体から演繹されうる対象ではなくなる。もし絶対的戦争が純粋概念として措定されるなら，現実に出現してきた多様な戦争は，いってみればそれの派生物だと位置づけられるのだが，「27 年覚書」ではこのような構図は否定される。『戦争論』では，いまだにつぎのような見解が基本になっている。

「かくして私たちは，まずはひとつの決定［決戦］を求める思想（der Gedanke einer Entscheidung）が［戦争］全体を貫徹し指導しているような例を取り上げ，つまりは，固有の戦争（der eigentliche Krieg）――いうなれば絶対的戦争（der absolute Krieg）の例を取り上げて，ついで別の章において，多かれ少なかれ監視状態へと大きく接近することを通じて（durch die mehr oder weniger große Annäherung）発生する若干の修正（Modifikationen）を考察することにしたい。」（VK: 813/VI-28）

このように修正を語るさいに，クラウゼヴィッツが距離を比喩として使っていることに注目しておきたい。概念としての戦争と，現実に存在するそれとの差異は，「接近する」（annäheren）か「遠ざかる」（entfernen）ことで定義されている。それは量的表現であって，なんらかの基準からの距離の大きさに還元可能である。つまり，問われているのが質の問題ではないことになる。「修正」とはこの場合，あくまでも量に関わっているものなのである。それゆえに，「27 年覚書」において語られている戦争の「2 種類」（doppelte Art）のあいだで想定されている質的差異は，第 8 篇でのふたつの戦争形式での差異とは明らかに異なっている。従来の『戦争論』解釈では，上記のような差異に，充分な注意が払われてきたとはいえない。例えば，クラウゼヴィッツに関していくつもの斬新な見解を示してくれたヒュー・ストローンは，「27 年覚書」での 2 種類の戦争という区別が「現実のものではなく，理念的であって，弁証法的な点を創り出すための対称的な極」だと述べているが（Strachan 2007: 82），このような解釈は『戦争論』第 8 篇には妥当するが，「27 年覚書」での提示には当てはまるものではない。27 年にクラウゼヴィッツが直面していた事態は，アザー・ガットによって「危機」（crisis）と名づけられた（Gat 1989: 213, 214, 218, etc.）。それはストローンにも受け継がれている（Strachan 2007: 77, 79, 148, 190）。両者のいう「危機」とは，クラウゼヴィッツがボナパルト的戦争こそが，「通常の戦争」だとする理解から離れて，現実の戦争が持つ多様性をそこからの距離によって解釈することを放棄したことの結果から生じている。このこと自体に異論はない。ただし，放棄がどのような理論的動機に基づいていたのかに関する評価は，彼らとは異なってなされる必要がある。

私たちはつぎに，『戦争論』第 1 篇第 1 章において，第 8 篇での絶対的戦争という概念＝観念がどのように廃棄され，「27 年覚書」での新しい戦争観へと移行するのかを検討したい。

付録 1　カール・フォン・クラウゼヴィッツ「1827 年覚書」

〔解題〕『戦争論』はクラウゼヴィッツの没後，マリー夫人や友人たちによって，残された草稿類から編集され，1832 年から刊行が開始された『戦争と戦争指導に関するカール・フォン・クラウゼヴィッツ将軍遺稿集』（全 10 巻）の最初の 3 巻として公刊された。その第 1 巻には，夫人の手になる「序文」のあとに，1827 年 7 月 10 日の日づけを持つ「覚書」，さらに夫人がこの「覚書」より

も「もっとずっと新しい日づけを持っていると思われる」と附言している「未完の論考」，それに日づけがないが，はるか以前に書かれたことが明白な「序言」という，3つの文章が収録されている。

以下に翻訳するのは，「27年覚書」のうち，本稿と関連する2つのパラグラフである。底本としては『遺稿集』（HW 1: xv-xvi）を採用した。ハールベルクの第19版『戦争論』（VK: 179–80）を参照している。

「私はすでに清書されている最初の6つの篇を，いまだにかなり未完なものだとみなしており，それはいま一度徹頭徹尾（durchaus）改訂されなければならない。この改訂にさいしては，いたるところで2種類の戦争（die doppelte Art des Krieges）によりはっきりと留意したい。それを通じて，一切の理念はより明解な意味，特定の方向づけ，より的確な応用を手に入れることができよう。この2種類の戦争とは，［まず第1には］敵の打倒（das Niederwerfen des Gegners）を目的とする戦争であって，そのさいに敵を政治的に殲滅するか（politisch vernichten），あるいは単に敵を無力化して，好ましい講和を強要するかは問題ではない。また［第2には］単に敵国の国境付近でいささかの領土の攻略を行なう戦争であって，その領土を領有するためか，あるいは講和にさいして有利な取引材料として使うためかは問題ではない。一方の種類から他の種類への移行はいうまでもなくありうるに違いないが，とはいえ，双方の試みが持っているまったく異なった本性（die ganz verschiedene Natur）はつねに強調しなければならないし，相互の非両立性（das Unvertraegliche voneinander）は明示されなければならない。

諸戦争におけるこうした実際に存在する区別（diese faktisch bestehende Unterschied）のほかに，さらに同様に実践的に不可欠な観点，すなわち，戦争とは他の手段をもって継続される国家政治（die fortgesetzte Staatspolitik mit anderen Mitteln）という観点が，きっぱりと厳密に断言されなければならない。この観点をつねに保持していれば，［戦争の］考察においてこれまで以上の統一性がもたらされるであろうし，一切がより容易に錯綜から解き放たれるであろう。」

付録2　カール・フォン・クラウゼヴィッツ「レーダー少佐あての手紙」（抄訳）

［解題］ 1827年12月22日と24日に，クラウゼヴィッツはプロイセン参謀本部のカール・フェルディナント・フォン・レーダー少佐にあてて，2通の手紙を書いている。レーダーは当時，参謀総長だったフリードリヒ・カール・フォン・ミュフリンク中将から，ある戦略課題を提示されていて，それへの解答を素描し，同僚のM大尉（ピーター・パレットは参謀本部のモンツ大尉だと推定している）の見解とともにクラウゼヴィッツに送付し，彼の見解を求めたのである。レーダーはクラウゼヴィッツとは旧知の仲であった。この求めに応じて，彼は2通の手紙でレーダーたちの解

答に論評を加えた。それとともに，同年7月10日の「覚書」ですでに素描されていた考えを，ミュフリンク批判（というより，当時のプロイセン軍上層部で支配的だった見解への批判）への含意を込めて繰り返している。

この2通の手紙の存在は夙に知られていたが[8]，その全文が公表されたのは1937年のことである（Clausewitz 1937）。それ以来，すでに80年以上の時間がたっているが，日本ではこの手紙は翻訳されていないだけではなく，それに言及した論評すら不在であって，わが国でのクラウゼヴィッツ研究の貧困を如実に示している。もっともドイツでもケッセルのように，それを「折に触れての仕事」（gelegentliche Arbeit）と述べて，あまり重視していない論者もいるが（Kessel 1987: 140），手紙はミュフリングの課題そのものへの解答になっているので，「2種類の戦争」の理論的精髄だけでなく，その具体的な応用例をも提示しているという点で，決して軽々しく扱うべきでない。

手紙の宛先であるフォン・レーダーは参謀本部の中部戦場担当長（Chef des mittleren Kriegstheaters）であり，その職責は主要にはオーストリア（そして副次的にザクセン）に対する作戦計画の策定にあった。ミュフリンクが彼に与えた課題とは，オーストリアが15万の兵力で，ザクセンの同盟軍2万の支援を受けてドナウを越え，ベーメンを目指して攻勢に出た場合の，ありうる敵の作戦計画と，その時間的・空間的な展開，そして，それに対するプロイセンの防衛計画を作成することであった。

ミュフリンクは今日の評価によると，「平時の」参謀総長としては有能で，参謀本部の組織改革などで功績を挙げていたが，独創的な戦略理解とはまるで無縁であったといわれる（Cf. Görlitz 1977:［邦訳，上巻：94–6］; Paret 1992: 123–4）。彼がレーダーに命じた作戦計画も，プロイセン軍部に伝統的だった防御を中軸に組み立てられていた。クラウゼヴィッツはミュフリンクの想定課題そのものに根底的な誤り，つまり，戦争の政治目的の看過と，それにともなう戦争のあり方の複数性の無視とを見抜いて，具体的にそれを指摘するとともに，自身の作戦計画をスケッチしている。このうち，計画のスケッチそのものの細部については，現在では歴史的な意義しかないので省略する。12月22日の手紙の冒頭にある理論的な部分のみの翻訳である。

翻訳の底本は1937年に刊行されたもの（Clausewitz 1937）を用いた。ハールヴェークはそれをそのまま彼が編纂したクラウゼヴィッツ論文集に収録しているので，それも参照している（VkS: 493–530）。なお，2通の手紙は全文がピーター・パレットとダニエル・モランによって英訳されているので（Clausewitz 1994）参考にした。原文の隔字体箇所は，傍点で示す。［］は訳者の註釈と補遺である。

［邦訳］

親愛なる友よ，あなたは私に送ってくれた課題とそのふたつの解決案について，私の見解を述べるように求められた。この返事は単にまったくの科学的関心からなされているのであって，あなたがそれを完全に内密なものとして扱うことを前提にして，私は筆を進める。

私がまずは，ことのはじめから（ab ovo）開始することを許していただきたい。というのも，この領域では，いわゆる戦略（die sogennante Strategie）［1］のように，必然的なものへの一切の基礎が，つまり，一切のまったく真実で疑いえない連関が欠けているからである。

戦争は決して自立した事物ではなく，異なった手段をもってする政治の継続（die Fortsetzung der Politik mit veränderten Mitteln）である。それゆえに，すべての大規模な戦略的構想の主要要素は，大部分が政治的本性からなっている。それが政治的本性からなればなるほど，そこには戦争と国家との全体がより一層含まれることになる。戦争計画の全体は，戦争に突入したふたつの国家双方の政治的な現状から，さらに，他の諸国家との彼我の相互関係から，直接に生じるのである。戦争計画からは会戦計画が生まれるが，とりわけ一切がひとつの戦場に縮減される場合には，両者はしばしば同一となる。とはいえ，ある会戦の個々の部分にさえ，政治的要素が入り込んでいるのであって，会戦などのような，どんな大きな軍事行為にも，そのなんらかの影響が現われていないことのほうがまれなのである。こうした観点からすると，大規模な戦略的全体についての純粋に軍事的な判定や，そうした全体についての純粋に軍事的な構想は，問題にならない。戦史を考慮しただけでも自明なのだが，こうした観点がまったく必要なものであることは，いかなる例証も不要であろう。もっとも，それにもかかわらずこのような観点が，今日にいたるまで認められていないのは，いまだになお大規模な戦略的構想における純粋に軍事的なもの（das rein Militärisches）が，政治的なもの（das Politisches）と分断されてしまっていて，後者がなにか不適切なものであるかのように扱われてきているからである。戦争とは，異なった手段をもってする政治的努力の継続（die Fortsetzung der politischen Bestrebungen mit veränderten Mitteln）以外のなにものでもない。私はこのような見解に一切の戦略を基礎づけているのであって，この見解の必然性を認めることを拒む人間は，なにが問題なのかをいまだに正しく理解していないのである。こうした原理を通じて，戦史総体が理解可能になるのであって，それなしでは，すべてはまるで巨大な不条理となってしまう。

である以上，会戦計画は，それがひとつの戦場についてのものであれ，複数の戦場についてのものであれ，［敵対する］諸国家の政治的状態や両国の相互的な配置を挙げることなしに，どうしたら可能になるのであろうか。

どれほど大規模な軍事構想も，それを一定のかたちへと規定するきわめて多くの個別的な事情から生まれるのであって，あたかも現実的事例であるかのように，仮定の事例を決定することは不可能である。この点について私たちは，ただの些末事をあれこれ考えているわけではなく，これまでまるで考察の対象にならないできた，きわめて重要な基本事項を考えているのである。たとえばしばしば，ボナパルトはフリードリヒ大王と比較される。だが，後者が500万人の臣下を持っていた［だけな］のに，前者が4000万人の臣下を持っていたこ

とは，時にほとんど考慮されないでいる。とはいえ，私としてはただ，まったく別の，ほとんど注目されていないが，しかしきわめて本質的な違いに注意を促したい。それはボナパルトが簒奪者であって，彼の巨大な権力を一種の恒常的な賭博を通じて勝ち取り［2］，その冒険的な経歴の大部分のあいだ，一度たりとも後継者を持たなかったが，フリードリヒ大王は真の世襲領を運用していたことである。両者が本性からしてまったく同一の個性を持っていたとしても，両者が同じように行動することはありえたであろうか。確実にそうではありえなかったのであって，この理由からだけでも，両者を同じ尺度で測ることはできないのである。さらにまた，仮定の事例をそのように組み立てて，そこに欠けているものは本質的でないと断言することはできない。とはいえもちろん，ほとんどの相互関係において，彼我の軍隊や国家がおたがいに完全に同一であって，相互に帳消しされると考えることもできる。しかしながら，そのような課題の解決は，有益な練習以外のなにものでもなく，その最良の結果でさえ，現実的な諸事例に対しては用いることができない。

かくして，そのような課題にあっては，諸力が帳消しされるという理由で，無数の事物が捨象されうるとしても，戦争行動そのものを作り上げ，政治的目的を決定し，その目的と現存する手段とから戦争目標を引き出させる諸事情を考えないわけにはいかない。戦争行為全体のこうした究極的目標，つまり，両者が同一であれば単一の会戦の究極的目標は，戦略家が設問しなければならないもっとも重要で最高のものである。というのは，戦略構想の基本がこうした目標にかかっているからであり，少なくともそれは目標によって規定されているからである。私が敵を打倒して無力にし，彼に私の講和条件の受諾を強制するという意図を持っていたり，持とうと望んだりすることと，ちょっとした地方やどこかの要塞等を征服して，講和までそれを手元に置いておき，その等価物を要求するための利益をえることで満足することとは，明らかにまったく別個なものなのである。ボナパルトとフランスが革命戦争以来置かれていた例外的な諸関係（die außerordentlichen Verhältnisse）［3］は，彼をしてほとんど常にいたるところで前者を可能にさせたため，それから発生する構想とその実行とを普遍的な規範（die allgemeine Norm）だとする考えが広まった。だが，それによってこれまでの戦史全体を，ひとまとめに判定できるとするなら，それは愚行にほかならない。私たちは戦争術を戦史から導出したいし，それこそが疑問の余地なく［洞察に］到達するための唯一の途なのだから，こうした戦史が語ることを過小評価してはならない。もしかすると，50 の戦争のうち 49 までが第 2 種の戦争だと，つまり，敵の打倒を目指していない，制限された目標（eine beschränkes Ziel）を持った戦争だということを見いだすとしても，私たちはそれが［戦争という］事物の本性のうちにあるのであって，常に間違った見解やエネルギーの欠如等に起因するものではないと確信している。私たちとしてはさらに，戦争を単なる暴力と撃滅の行為（ein bloße Akt der Gewalt und der Vernichtung）と見なして，こうした単純な概念から論理的帰結として，一連の結論を引き出してしまう誘惑に陥るべきではな

い。そのような結論は，現実的世界の諸現象と決して合致しないのである。そうではなく，現実的戦争はひとつの政治的行為（ein politischer Akt）であり，その法則は完全にそれ自体のうちで支えられているわけではなく，戦争はひとつの真の政治的道具（ein wahres politisches Instrument）であり，それ自体で働いているのではなく，別の手によって導かれているということに立ち返るべきである。この手とは，政治のことである。政治が強大な利害関係，全体とその現状とを包括している利害関係から生じれば生じるほど，［戦略］課題が存在か消滅かのいずれかにかかわればかかわるほど，政治と敵対性とは合致し，政治は敵対性へと吸収され，戦争は単純になって，暴力と撃滅という概念からだけ由来することになり，戦争はこの概念から論理的に展開されうる一切の要請に対応するようになり，その一切の部分がなんらかの必然性ある連関を持つようになるのである。そうした戦争はまったく非政治的な外観を示すために，それこそが規範的な戦争（der Normalkrieg）だと見なされてきた。しかし，ここでも他の戦争にあってと同様に，政治的原理（das politische Prinzip）は明らかに存在しており，それは暴力と撃滅という概念と完全に合致しているが，ただ私たちの眼から隠されているにすぎない。

以上のような議論にしたがうなら，ただの脅迫，武力を背景にした交渉，あるいは，同盟関係の事例では，単なる見せかけの介入といった，目標がほとんど取るに足らない戦争が存在することを，私は証明する必要もなかろう。こうした戦争が戦争術にはまったく対応しないと主張するのは，完全に非哲学的（unphilosophisch）であろう。敵の打倒と撃滅という極限を目標としない戦争が理念的に（vernünftigerweise）ありうることを，戦争術がひとたびきっぱりと容認するなら，戦争術は政治の利害関係が要求しうる可能な一切のニュアンスを包み込まなければならない。政治に対する戦争術の課題と権利とは主として，政治が戦争の本性に反する事物を求めたり，道具の働きについての無知から，その使用にさいして過ちを犯したりすることを防ぐ点にある。

私はさらに，なんらかの戦略的構想が可能になりうる場合にはすべて，彼我双方の戦争目的が決定されていると主張したい。こうした目的は大部分，彼我双方のあいだでの大いなる政治的相互関係から，さらには，行動に関与しうる他の諸国家との相互関係から生じる。このような事情を規定することのない構想は，なんらかの会戦や攻囲戦などといった，恣意的に想定された目的のうえに築かれた，若干の時間・空間関係の単なる結合でしかない。さらには，そのような目的が必然的であるか，他よりも優良であるかが示されえないのであれば，他の諸構想によって論破されたり反論されたりしうるのであって，そのことなしには，この別個の構想は絶対的真理に接近することはない。以上がこれまですべての戦略的討論の歴史である。だれもが恣意的に引かれた輪のなかをぐるぐると回っているが，だれも一切の行動が開始される点にいたるまでその基礎を追い求めない。その点こそが，戦争に固有な動機が存在し，また，その論理的帰結が唯一はじまりうるところなのであるが。戦略において正し

く適切なものが生じるのは，天賦の才にあふれる将帥の感触（Takt）の仕事であって，将帥はさまざまな相互関係を一瞥で見抜き評価する［4］。こうした感触は行動にとっては充分だが，明らかに議論のためには不充分であり，事物の困難な提示よりもきわめて高次ななにものかが必要とされるのである。

親愛なる友よ，私が結局のところあなたの課題からどれほどわずかしか進んでいないことがお判りだろう。なによりもまず，私としてはこう問わなければならない。オーストリア人は15万の兵によって，プロイセンを打倒し無力化するという意図を持っているか，そうした意図を持ちうるか，それともなにかの制限された目的をもって（mit einem beschränkten Ziel）満足しようと思っているのか，である。7年戦争において，彼らはためらいなく第一の意図を選び，そのために主要にはザクセンとラウジッツを通ってベルリンに向かう進路を取った。そのさいオーストリア人は失敗した。このことは大いなる誤りだと正しくも評価されたのであって，また，彼らが作戦をラウジッツよりもシュレージエンにより一層向けたのも，同じように誤りだと見なされている云々」

訳註

［1］ここでいわれている「いわゆる戦略」（die sogenannte Strategie）について，ピーター・パレットは文字通りでは意味をなさないとして，「いわゆる戦略科学」（the so-called science of strategy）と訳している。これは解決になっていない。「いわゆる」とある以上，特定の戦略概念がクラウゼヴィッツとフォン・レーダーとのあいだで了解されていたと思われるが，残念ながら訳者はまだそれを突きとめえていない。

［2］ナポレオン・ボナパルトが「生死を賭けた」賭博者であることは，『戦争論』でも指摘されている。「ボナパルトはしばしば狂気のような極端さに身をさらす，激情的な賭博者（der leidenschaftliche Spieler）」（VK: 588/V-14）とされる。

［3］ボナパルトによって頂点に達した打倒＝撃滅戦争は「例外的」だという指摘に注目したい。

［4］天才が判断において発揮する感触（Takt）に関しては，『戦争論』第1篇第3章「軍事的天才」等を参照。この天才理解は，本稿ですでに述べたラプラス的「知性」と関わっている。事態の因果連関を隅から隅まで見透せる存在である。

注

1）同書はのちに，彼のより広範な軍事思想史（Gat 2001）に組み入れられている。

2）この決定的な会戦がクラウゼヴィッツにもたらした影響については，ピーター・パレット（Paret 1985: 123-6）やヘールベルク＝ローテ（2001：28-39）に詳しい。

3）エルンスト・カッシーラーの簡明な記述を，ここでは挙げておく。

「それゆえに同一律と相並んで，それと同じ妥当性をもち，同じく不可欠な真理の基準たるべき『充分理由の原理』が出現する。ライプニッツによればこれこそすべての『事実の真理』の前提をなすものに他ならない。数学が同一律に従うのと同じ意味で，物理学は充分理由律に従う。物理学は単に純粋概念の関係の確定を目指すものではない。それは観念間の一致不一致

の指摘で立ち止まるのではない。むしろそれは観察と感覚的経験から出発しなければならないが，他方それはこれらの観察結果を単に配列整理するだけでこれらのデータの積みかさねに終わっていては無意味である。物理学が要求するものは，この種の総和ではなくて一つの体系である。そして物理学がこのような体系に到達するのは，それが『事実』の弛い接合を自分のうちで固く結びつけ，その結果これらの事実が『原因』と『結果』の総括として現れるに至ったときである。空間的並列と時間的継続は，このような操作を経て初めて真の『連関』となる。」（Cassirer 2007: 31『啓蒙主義の哲学』上巻，中野好之訳，ちくま学芸文庫，2003 年，p. 65.）

4）クラウゼヴィッツは一般士官学校の校長となった翌年，ヨーハン・ゴットフリト・キーゼヴェッター（1766–1819）について，こう書いていた。「キーゼヴェッター教授が病気なので，Encyklopädie はいまでは教えられていない。この卓越した（vortrefflich）教師はおそらく，復帰されないであろう。……諸学の Encyklopädie は疑いの余地なく若者にふさわしいのである。」（Denkschrift über die Reform der Allgemeinen Kriegsschule zu Berlin. Berlin, 21. März 1819. Schriften 2: 1161.）こうクラウゼヴィッツが書いたのは，19 年 3 月 21 日だが，キーゼヴェッターは同年 7 月 9 日に没している。キーゼヴェッターが教えていた『エンチクロペディー』の内容は判らないが，おそらくは諸学への包括的な入門講義だったと思われる。

5）例えば，『戦争論』に組み込まれた「勝利の極限点について」（章番号なし）における「それ自体として充分な理由」（an sich hinreichende Grund）という表現（VK: 944）を参照。「充分理由」は第 8 篇第 1 章にも登場する（VK: 950/VIII–1）。

6）「とはいえ，私たちが抽象界から現実へと移行すると（wenn wir aus der Abstraktion in die Wirklichkeit übergehen），すべてが一変する。抽象界ではなにごともオプティミズム抜きでは進まなかったのであって，彼我のいずれもが完全性を追い求める（nach dem Vollkommenen strebend）だけでなく，それを達成できると思っていると想定せざるをえなかった。」（VK: 196/I–1–6）

ここでいわれているオプティミズムは『戦争論』の既存の翻訳では「楽観論」（篠田英雄訳・日本クラウゼヴィッツ学会訳）「楽観的に」（清水多吉訳）と訳されている。確かに，例えばアダム・ハインリヒ・フォン・ビューロウの場合であればそう訳して間違いない。ビューロウは有名な『現代戦争体系の精神』（1799 年）の「序文」のなかで，ヨーロッパ諸国はやがて同一の兵器，同一の戦略・戦術を持つにいたって，いわば将棋の千日手のような状態になって，戦争は無意味となるという展望を述べていた（Bülow 1799: 2）。彼はそのような立論を「オプティミズム」と呼んでいる。要するに，普通いわれるところの楽観的見通しのことである。しかし，クラウゼヴィッツにあっては，それが「完全性」（das Vollkommene）と結びついて，その達成が視野に入っているので，およそ単なる楽観的見通しなどとは無縁である。それはいまある世界こそが最善の状態（つまり，オプティマムな状態）であるとする主張を支えている。ヴォルテールが小説『カンディード』のなかで，パングロス先生に代表させて嘲笑したオプティミズムにほかならない。そして，それはライプニッツの充分理由律の一部なのである。

7）この情熱は啓蒙主義の時代に，とりわけピュイセギュールによって表明されている（Cf. Gat 1989: 32）。

8）マックス・イェーンスはすでに大著『戦争科学の歴史』第 3 部（1891 年）のなかで，この未公刊書簡に言及していた（Jähns 1891: ）。普仏戦争後期における有名なビスマルクとの対立にさいして，ヘルムート・フォン・モルトケがレーダーへの手紙を利用したらしいが，私は目

下，ある種の事情からその詳細を詳らかにできないでいる。

参 考 文 献

Aron, Raymond

1987 *Penser la guerre. Clausewitz*, 2 tomes, Paris: Gallimard.

Bülow, Dietrich Adam Heinrich von

1799 *Geist des neueren Kriegssystems*, Hamburg: Benjamin Gottlieb Hofmann.

Caemmerer, Rudolph von

1905 *Clausewitz*, Berlin: B. Behr's Verlag.

Clausewitz, Carl von

1831–37 *Hinterlassene Werke des Generals Carl von Clausewitz über Krieg und Kriegführung*, 10 Bde, Berlin: Ferdinand Dümmler.（本稿では HW と略記して，巻数とページ数を表示する）

1922 *Politische Schriften und Briefe*, hrsg. von Hans Rothfels, München: Drei Masken Verlag.

1937 *Zwei Briefe des Generals Carl von Clausewitz. Gedanken zur Abwehr*. Sonderheft zu militär-wissenschsftliche Rundschau, Berlin: E. S. Mittler & Sohn.

1969–90 *Schriften-Aufsätze-Studien-Briefe*, 2 Bde., in 3 Teilen, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.（本稿では Schriften と略記して，巻数とページ数を表示する。なお，第 2 巻は 2 分冊に分かれているが，ページ数は通しになっているので，引用にさいして分冊は示さない）

1979 *Verstreute kleine Schriften*, hrsg. von Werner Hahlweg, Osnabrück: Biblio Verlag.（本稿では VkS と略記して引用する）

1980 *Vom Kriege*, 19. Aufl., hrsg. von Werner Hahlweg, Bonn: Ferdinand Dümmler.（本稿では VK と略記して，ページ数と篇・章，さらに節があれば，それを示す。VK: 879//VII–5 とあったら，それはハールヴェーク版の 879 ページ，第 7 篇第 5 章である。章分けされていない箇所に関しては，ページ数のみを記載する。原文での強調部分は，必要な場合を除いて省略する）

Gat, Azar

1989 *The Origins of Military Thought from the Enlightenment to Clausewitz,* Oxford: Clarendon Press.

2001 *A History of Military Thought,* Oxford: Oxford Univ. Press.

Goerlitz, Walter

Heuser, Beatrice

2002 *Reading Clausewitz*, London: Pimloco.

Kant, Immanuel

1968 Prolegomena, in: *Werksausgabe*, hrsg. von Wilhelm Weischedel, Bd.5, Frankfurt am Main: Suhrkamp.（久呉高之訳「プロレゴーメナ」『カント全集』第 6 巻，岩波書店）

Kessel, Eberhard

1987 *Militärgeschichte und Kriegstheorie in neuerer Zeit*, Berlin: Dunker & Humblot.

Laplace, Pierre Simon de

1812 *Essai philosophique sur les probabilités*, Paris:（『確率の哲学的試論』内井惣七訳，岩波文庫）

Rosinski, Herbert

1935 “Die Entwicklung von Clausewitz’ Werk “Vom Kriege” im Lichte seiner “Vorreden” und “Nachrichten”,” *Historische Zeitschrift*, 151, pp. 278–93.

Strachan, Hew

2007 *Clausewitz’s* On War: *A Biography*, New York: Atlantic Monthly Press.

カッシーラー，エルンスト

2007『啓蒙主義の哲学』

山崎カヲル

2020「クラウゼヴィッツと政治的交通という概念」『コミュニケーション科学』No. 51, pp. 85–116.

2021「クラウゼヴィッツと戦略概念の形成」『コミュニケーション科学』No. 53, pp. 83–118.